《理を責める》考―八文字屋本浮世草子の人物と作劇

Thinking about “Ri wo Semeru” (To appel rationally) with a Focus on Characters and Dramaturgy in Hachimonjiya-Ukiyozoshi

高橋明彦
TAKAHASHI Akihiko

本題に入る前に、私の過去のささいな体験を述べることにしようと思う。それは実につまらないたわいのないものだが、20年以上もむかし、まだ院生だった頃のことだが、学会のあとの二次会でとある西鶴研究者の方と同席したことがあった。初めて話す人であったが、私は勿論その方を存じ上げており、興味も持っていた。その方は、当時多田南嶺の研究をしたいと思っていた私の「八文字屋本などの浮世草子を研究しています」と言う自己紹介を聞くやいなや、こうぶちかましてきたのである。「井原西鶴が始めた浮世草子のことを、八文字屋本なんかと同列に論じてほしくないね。浮世草子という言葉をつかって、西鶴を、そんな凡百の作家と一緒に括ってほしくないね。」

私はすっかり驚いてしまったが、私も少々意地が悪くまた興味もあったので、「西鶴はどこが優れているのですか?」とさりげなくしかしはっきりと聞いてみた。すると、その方は「人間を描けているからね」と、さらにはっきりと明言したのである。いまどき20世紀も後半のこのポストモダンのご時世に「人間が描けている」などと口にする文学研究者がいるなどとは私には全く信じられなかったが、私は、そういう人に対して宗教論争を挑むほどには残念ながら愚直なまじめさはなかったので、ただ心の中で驚愕しそして半ば軽蔑して「では、人間ってなんでしょうか?」と聞いたのだった。しかしその人はさらに軽蔑したように、「君は人間が描けているということもわからんのかね」というようなことを言い捨てたのである。そんなんでよく文学研究が出来るな、というようなニュアンスであろう。

その人とはその後全く付き合いもないために、ややこしい話にならずに済んでいるが、私としては、驚愕や軽蔑といった不穏当な言葉を使っているものの、これは、この人とは無関係に、いずれ立ち向かうべき価値のある問題であることに気づいてはいたのだ。

とは言えそもそも、人間を描けているということを、どのように研究して行けば良いのか、その方法さえ私は（われわれは）よく分かってはいないのではないだろうか。

本稿の結論は、その人の言うように、井原西鶴は凡百の作家と違って偉大であり、そして江島其磧などはまるで人間が描けていない、愚劣な作家にすぎないことを追認することになるだろう。しかし、それをなすために私は人間とは何かといったような、人間を演繹したり、人情の内実を定義したりするような手順を踏むことなく、この問題に切り込んでみたいと思うのである。

ここで私が注目しようと思うのは「理を責める」という言葉である。この慣用表現は既に『太平記』等に見られるようで、『角川古語辞典』には「人を道理で追い詰める。理攻めにする。」と語義を記している。理を言う、理を尽す、道理を責める、義理を責める、などの

［キーワード］江島基磧　井原西鶴

語もほぼ同義と言えるだろう。

浮世草子においてもこれらの語彙は多用されている。「「藤五郎がうたざるは、うつにまさりし武道」と理をせめて「天晴神妙成る心入れ」と、国中に是を誉ける。」（『武家義理物語』巻六の三）の如くである。登場人物は理屈を言い、その理屈は他の登場人物（や読者）を納得させる。登場人物の中には無軌道に、まったくの脈絡も無く、勝手気ままに行動するものもいるかもしれない。そしてこれがストーリーの複雑さをつくりあげ、ひいては作品の面白さにつながっていくのだろう。

ただし、理に従った言動は、その人物をその理の機械のごとくに見せるのではないだろうか。坪内逍遙が『小説神髄』で馬琴『南総里見八犬伝』を例にあげ八犬士を「仁義八行の化物」と呼んだのは、そういう事態を言うものだろう。吉本隆明『言語にとって美とは何か』で近松『出世景清』における二つの死（大宮司と小野姫を救うために出頭する景清、および嫉妬から訴人に荷担してしまう阿古屋）を、儒教的倫理と地上の俗的倫理として区別して後者に価値を見出しているのは、阿古屋の言動にはすでに「理」で割り切れないものを感受しているからであろう。H・ベルクソンは、すべての物質が科学法則（理）に従っているこの宇宙において、生命体（身体）のみが法則からはみ出す予見不能な新しいものを生み出しうる、と言った。予見不能な新しいもの、あらかじめ決まってはいないもの（未決定性）こそが意識の本質である。

柴田正良『ロボットの心』や森山徹『ダンゴムシに心はあるか』などを参照すると、心（意識）の有無は知性や生命の有無とは全く無関係である。人は躊躇無しに習慣的に行動する時、無意識である。逆に、ロボットや昆虫であっても躊躇が生じる時、それを意識と呼ぶことができる。なによりもわれわれは、紙の上の文字に心を持つ《人間》を見出している。

中村幸彦氏の画期的な論文「文学は「人情を道う」の説」が雅＝理論における「人情」をモチーフとしたものであるなら、本稿はそれと裏の関係にあり、俗＝文芸における「理」をモチーフとして論じるものである。とは言えまだとば口に居るすぎない。そもそも、整理すべきことは多い。

たとえば、今日ではすでに義理と人情を対立的にではなく相互浸透的に捉えるように（源了圓『義理と人情』）、理と情とても単純な対立ではない。また、ストーリー的仕組みの面白さと、登場人物の心理描写とは、反比例（対立）しているようにも見える。例えば、浮世草子における詐欺譚は、詐術の妙味を主題とする儻偶物と、詐術に掛かる人物を主題とする気質物とで、描きようが異なっている（拙稿『多田・南嶺齟齬の位相』）。しかし、この対立も見せかけのものにすぎないはずである。

以下、具体的な作品として、西鶴『諸国話』巻四の二「忍び扇の長歌」、近松『心中重井筒』、其磧『善悪両面常盤染』などを扱う予定であるが、まずは、「理を責むる」（同義語も含んで）それらの用例を集めて分析することにしよう。ただし、今回の本稿じたいは茫漠、凡庸なメモであり資料集に終ることをあらかじめおことわりしておく。

○「理」とは何か？

角川古語辞典「理」の全文を以下に示しておく。「道理」と同義であり、「義理」も原義は同じであって、具体的には①一般通俗的意味、②仏教的な意味、③儒教（朱子学）的な意味に分けうる。俗文芸においては、あくまで①が基本である。

り［理］

名①道理（だうり）。物事の筋道。理屈。通常、社会的にも承認された普遍

性のあるものをいうが、一個人が自己本位にいうこともある。「真心に念仏せさせ給はゞ、我御ための善知識ともなり、亡者の御ため菩提のたよりともならめ…と世間のりを申しつくし給へば」〔栄花・楚王の夢〕「聖徳太子十七ケ条の御憲法に、人皆心あり、心各執あり…是非の理誰かよく定むべき…とこそみえて候へ」〔平家・二・教訓状〕「藤ばかま誰窮屈にめでつらん／理をはなれたる秋の夕ぐれ」〔曠野・員外〕

②仏語。中国仏教学において、万物の差別的、現象的な相を事というのに対して、その普遍的、平等的な本体、本質。また、聖者の至りうる普遍的な真理。「事理無礙」など、華厳教学では特に重要な用語となる。「愚なるもの、狂ぜるにあひて、又我も狂ぜむとは、いかにしあひ給ふぞ。事に付けては六道の衆生父母也。理に付けては自他の仏性一如也」〔沙石・一〇本〕「未得の人は句に参じ、至得の人は意に参ずといへり。句は教、意は理也。教権理実といへり」〔ささめごと・下〕

③②に基づく朱子学の基本概念の一。天地万物の本体。根本理法。太極。天地未生の世界に、既に気③に先立って存在し、気が展開して陰と陽に分れ、それがさらに五行となり万物を生じる、その根本理法となって、その生成の各過程、個々の事象・事物にそれらの本体として内在すると説かれる。このように天地万物の世界では、理と気とは密接不離に結びつく。人間における性もまた、この理を受けたものである。「命とは人々天よりうくる所をいふ。これに理と気との二つあり。生成するものを気と云ふ。その気を主るものを理と云ぞ。…さて性とは理と気とをうけて性となるぞ。さあれば性は理なり」〔彝倫抄〕「夫れ、天地ひらけざるさきも、開けて后も、いつも常にある理を大極と名づく。此の大極うごいて陽を生じ、静にして陰を生ず。此の陰陽は元一気なれ共、わかれて二つとなるなり。又わかれて五行となる。…此の五行支わかれてよろづのものとなる也。此の五行…此の如く相聚りて人の形をなして、其のうごきはたらくものを気と名づく。此の気の中にをのづからそなはれるものは理也。是れ則ち大極也。これを道となづく」〔三徳抄〕

りの当然　道理に照らしてまことにもっともなこと。「先祖之家業を顧み、一廉之働き有べきは理之当然也」〔甫庵太閤記・一四〕「うたがひうけたるうへ、かゝる目にあひ、くやしけれども、りのとうぜんにいひわけたゝず」〔膝栗毛・六・下〕

りを暗ます　道理に外れたことをする。「又怒ては理を暗まし、身をあいして人の悲をしらず」〔子孫鑑・中〕

りを攻む　人を道理で追い詰める。理攻めにする。「人僻事を言を、理を攻て言勝は悪き也」〔正法眼蔵随聞記・二〕

りを付く　①道理があることを認める。所有権などを争う一方の者の主張に道理を認め、勝者と判定する場合などにいう。「Riuo tçuguru〈ある人に道理があり正当であると判定する〉」〔日ポ〕「〈野牛ガ狼ニ〉とく走り着きたらん物に其の理を付させ給へと云ふ」〔伊曽保・中〕　②筋道を通す。是非・当否などをはっきりさせる。「金が出来ねへければ、手足をしばつて抱いて寝るとも女郎にするとも、二ツに一ツ理をつけねへで置くものか」〔春色恵の花・初・六〕

りを尽す　道理を明らかにし尽くす。十分に道理を説明する。「Riuo tçucusu〈あらゆる道理を述べる。または、適切にことばを尽くして道理を説く〉」〔日ポ〕「たとへ証文あるとても、ぬすみとられし、しよそんのたて、などかはとらでおくべきと、利をつくしてぞ申ける」〔説経・しだの小太郎・初〕「理をつくしてのたまひしに、吉之もつての外、立腹し給ひ」〔高名太平記・五・一〕

りを非に曲ぐ　正しい道理をあえて無視して無理を通す。「ただ此のたびは理を非にまげて、かれがほんぷくをまつよりほかの事あらじ」〔水鳥記・上〕「己が勝手のみ思ひ、理を非にまげても、手前へ

取込む算用ばかりして」〔教訓雑長持・一〕

りを曲ぐ　正しい道理をあえて無視する。無理を承知で事を運ぶ。「りをひにまぐ」とも。「あの六代をとゞめて行に、心やすうふちすべき者のなきぞ。たゞ理をまげてとゞまれとの給へば」〔平家・七・維盛都落〕「理をまけてといへるには枉をかけり」〔名語記・八〕「車は横しまに推さず、riuo mague て断る事なし」〔ロ師文典〕

日葡辞書「理」の全文は次の通りである。

RI) リ（理）Cotowari（理）道理，または，推論．¶Rini vorur.（理に折るる）道理に負ける，または，道理に屈する．¶Rini cacauarazu.（理に拘はらず）道理にかまわない．¶Riuo maguru.（理を枉ぐる）道理をゆがめる．¶Rini tçmaru.（理に詰まる）道理によって言い負かされる．¶Riuo tçcusu.（理を尽す）あらゆる道理を述べる，または，適切に言葉をつくして道理を説く．¶Rini Fazzururu, l,moruru.（理に外るる，または，漏るる）道理にくい違う．

［＊まとめ］角川の①に相当する。

○西鶴の用例

丸付数字は全集等の巻数、数字は頁数や行数である。本文を引用した後、注記があれば一段下げて＊で附した。本文は冨士昭雄『対訳西鶴全集』『（同）総索引』による。順不同、語彙毎にならべる。

○義理つまる

⑦２８１（伝来記、巻八の一）

箱を明れば、何もなく、大脇指をこしを見付け、「そなた様を、最前から、世のつねの商人とは見請ず、いかなる事ぞかし。女の無用なる尋ね事ながら、かりそめながら契りをこめて、子細を聞ではおかれじ。先づ自が命は、貴さまへ参らせ置からは」と、義理つまり、至極の所、此上は包みがたく、

＊対訳「道理にかなった詰問に、絶体絶命となり、この上はむげに隠すこともできず」

○義理つまれる心底

⑧１１８（武家義理、巻五の三）

相果し跡にても、身をおもふ〔身びいきの〕取沙汰にあへるは、女ながら口惜しきと、義理つまれる心底を〔木田丹後は〕深く感じ、人しれず脇道より下人におくらせ、命を助給へり。

＊義理をつくした女の心底を、木田丹後はふかく感じて命を助けた。

○義理づめ

⑬７５（胸算用、巻三の二）

惣じて掛は取よい所より集めて、埒明ず屋としれたる家へ仕廻にねだり込、言葉質とられて迷惑せぬやうに、先より腹の立やうに持てくるとき、なを物静かに、義理づめに、外のはなしをせず、今あがり口にゆるりと腰かけて、

⑯１２（俗つれづれ、巻一の二）

菰きせの四斗樽かぎりもなく飲虚ぬれど、終に酒の酔の馬鹿にあはず。是をおもふに武蔵野のうちばに呑と見えたり。義理づめ、意趣の外は、鞘とがめなかりき。

＊対訳「菰かぶりの四斗樽がかず限りなく空になるが、これまえ酒に酔っぱらった馬鹿者を見たことがない。これを思うと、武蔵野の人びとは控え目に酒を飲むとみえる。武士が義理づく、あるいは恨みがあって刃傷に及ぶということはあるが、刀がふれあったくらいで咎め立てをすること

はなくなった。」

○義理をいひ聞せ

⑧１５２（武家義理、巻六の三）

藤五郎も是はと、さしあたつて分別し、「主命の御用の時、たとへ無事の身成とも、うつべき所にあらず。殊更かゝる難病、なをもつて」と、大蔵に義理をいひ聞せ、所の人に妙薬をおしへ、

＊対訳「藤五郎も（こんな所で敵に出会うとは）と驚いたが、当座に分別して、今は主命で使者に行く途中だから、仮に相手が無事の身であっても、ここで敵を討つわけにはいかない。ましてや、相手は落馬して酷いケガをしているのだから、なおさらである」と、（連れの）大蔵へも道理を言い聞かせて、土地の人へは落馬のケガ用の薬を教えて、」

○義理をつめる

①１８８（一代男、巻六の一「喰さして袖の橘」）

けふをかぎりに舌かみきる所へ、世之介是を聞もあへず、死に出立にてかけこみしを、おのおの懸合、義理をつめ、至極にあつかひ、其後太夫を手に入侍る。

＊世之介を慕う太夫三笠が折檻に合い、死を覚悟して世之介に手紙を出す。世之介は死に装束で駆けつけ、人びとも駆け集まってきて、道理を説き、円満な取り計らいをした結果、世之介は太夫を手に入れる。ここには具体的な会話がない。つまり、義理を詰めることそれ自体を描かない。

①１９２（一代男、巻六の一）

いづれも情にあづかりし過にし事共語るに、あるは命を捨る程になれば、道理を詰て遠ざかり、名の立かゝれば、了簡して止めさせ、つのれば、義理をつめて見ばなし、身をおもふ人には、世の事を異見し、女房のある男二は、うらむべき程を合点させ、魚屋の長兵衛にも手をにぎらせ、八百屋五郎八までも言葉をよころばせ、只此女郎の人をすてずに、まこと成こゝろを思日合、

＊扇屋の夕霧の思い出。あまりのぼせあがった客には道理を言って聞かせて廓がよいをやめさせた等の真心。

③８９（五人女、巻三の五）

物語せし末を聞に、さてこそ我事申出し、「さても〳〵茂右衛門めは、ならびなき美人をむすみ、おしからぬ命、しんでも果報」といへば、「いかにも〳〵、一生のおもひ出」といふもあり。また分別らしき人のいへるは、「此茂右衛門め、人間たる者の風うへにも置やつにはあらず。主人夫妻をたぶらかし、彼是ためしなき悪人」と、義理をつめてそしりける。茂右衛門立聞して、「慥今のは大文字屋の喜介めが声なり。哀をしらず、にくさげに物いひ捨つるやつかな。……」

＊おさんと欠落した茂右衛門を、分別らしき人が道理を立ててそしる。茂兵衛はそれを物陰で聞いている。

⑥３２５（男色大鑑、巻八の一）

我又衆道にもとづき二十七年、そのいろをかへ品を好、心覚えに書留しに、既に千人にをよべり。是を思ふに、義理をつめ意気づくなるはわづかなり。皆勤子のいやながら身をまかし。独り〳〵の所存の程もむごし。

＊その恋のいきさつを考えてみると、義理を立て意気地を通して契りを交わしたのはめったにない。

○道理につまり

⑧１４（武家義理、巻一の二）

「右もらひしは姉なれば、難病〔疱瘡〕は世に有ならひ、たとへむかしの形はなくとも、是非におくらせ給へ。一命

にかけても夫妻願ひの所存。ことに此たび妹の心入。女ながら道理につまりける」と、心中の程〔手紙で〕いひやりしに、＊姉は明智十兵衛光秀の許婚であったが疱瘡で醜くなり、妹が代わりに嫁ぐ話。十兵衛は妹の志を認めた上で、あらためて姉を妻にもらう。

○道理を責る

③１１６（五人女、巻四の四）

それより四十九日〔お七の処刑後〕の餅盛など、お七親類御寺に参て、「せめて其恋人〔吉三郎〕を見せ給へ」と歎きぬ。様子を語て、「又も哀を見給ふなれば、よし〳〵其通〔このまま、会わない〕に」と道理を責めければ。

＊お七の親戚は、四十九日に吉三郎に会いたがったが、吉三郎は恋煩いから命も危うい状態になっていて、寺の者は会わせない。

⑨１２（新可笑記、巻一の一「理非の命勝負」）

貴方の明徳門の文字の見やうは、諸人の眼色とは事かはり、面躰は仰き見ん共、瞳子（ひとみ）にては地を見る事、是第一の目付なり。されば眼は神明の宅にして明鏡のごとし。胸中に邪あれば瞳子正しからず。心爰にあらされば見れ共みへざるにはあらずや。貴方の悪を掩ふという共、其罪いづくに遁れんや」と、道理をせめ付、骨髄にこたへ魂（たまし）ゐ割（さく）るばかり、落し付けて申せば、侍赤面（さぶらひせきめん）して、

＊宮内が落ち着き払って理責めにすると、侍は顔を真っ赤にして怒った。ここでは、理が相手の感情（怒り）へ接続していく。

⑪１０８（桜陰比事、巻三の九）

「兎角宿を御同道なされ御出候事まぎれなく、それより今に帰られねば、内義こなたへたづねられしも、尤に存候」と、いづれも道理をせめて申せば、牢人も此いひわけにめいわくして、是非なくきのふめしよせられし御かたまでいひ聞しても、女房一円合点せず

＊論理的に語って、相手を落ち着かせる。

⑭１９０（織留、巻六の二）

「されば一生連添よしみ、妻女の心入のうらみ、世間の人のおもはく、彼是もつて心有べき人は、かりにもめしつかひの者に心かけまじき事」と、物にこりたる人の、後よく合点して、道理をせめて云置れし。

＊腰元などに手をかけてはならない、という戒め。

○道理を詰る

⑧１２２（武家義理、巻五の三）

大殿御病気にならせられ、次第に頼みすくなく見へさせ給へば、今更おどろく事もなく、追腹を覚悟して、妻にも此事かたりて、道理をつめ、今生の暇乞しけるに

＊話法ではない。

⑪１１９（桜陰比事、巻四の一）

刀をとつてひざを立、中〳〵牢人の心にしたがはず、色々道理をつめ、言葉をつくせども、此男聞わけずして、つめひらきあらくなる時、

＊話法ではない。

○理・利をせめる

⑧１５３（武家義理、巻六の三）

「藤五郎がうたざるは、うつにまさりし武道」と、理をせめて、「天晴神妙成る心入れ」と、国中に是を誉ける。

＊主命の旅の途中で、敵を偶然見付けるも、敵は落馬して大けがを負っていた。藤五郎は、所の人に妙薬を教え、「重体により今は敵を討たない」と書いた手紙を託した。敵の

伝七はその仕儀に感銘を受け、自ら出頭して自害した。理を責めて、称賛している。

⑮４９（置土産、巻二の二）

聞に理をせめていたはしく、亭主もまことなるを満足して、＊聞いてみるとそれももっとものことなのでかわいそうであり。理を責めて、感情（いたわり、いとおしみ）へ接続していく。

⑮１８１（文反古、二の二「安立町の隠れ家」）

「それがしは岩塚団之丞とて、生国越前の者成が、大かた様子も見られよ。疝気に筋骨いたみ、主人にお暇申、熊野へ湯治いたすの所に、是は存知もよらぬ難儀。此方は多勢なれば、せんぎの仕やうもあれど、若年の敵うつべき心掛、はやつて我を見違へらるゝの段、すこしも意恨にぞんぜぬ」と、利をせめての断り。

＊本当は敵であったのに、敵にまんまとだまされてしまう。理屈（詭弁、嘘）で言い逃れる。

⑰１６０（浮世栄華、巻二の一）

爰がおもはくの外なり。中〳〵肌をゆるす風情なくて、「わたくし心底は、書院かけ物に毛頭かはる所なし。既につれあひ死期におよびて、みづから誓紙二枚書て、一枚は棺桶に入て、めいどのはなむけ、又一枚は世に残しぬ。『我物好にて男にまじはり、数〳〵のたはぶれはするとも、まことはゆるさじ』と申かはせし身なれば、二十三より後家を立、大かた男に出合し事三百余人、かくまではうちとけて、一生まことは絶たり」と、利をせめての義理につまり、此男おもはくの外に、下帯しめて起わかれ、何とやら心残りに見へける。

○理をつくす

⑧１５５（武家義理、巻六の四）

「今より其方さまを頼入。衆道のとてもかなひがたし。誠に兄弟ぶんにおぼしめされ、御引廻しに預り度」と、理をつくして申せば、右右衛門是を聞分、

［＊まとめ］用例は悉皆的に拾ってある。爆発的に多いわけではないが、西鶴作品においても、登場人物達は理屈を述べていることは分かる。「理を責める」等は、基本的に、会話文を受けて、会話の調子を記述する語である。登場人物がどんな感じでどんなことを喋っているのか、端的に判断する語である。ただし、会話文を受けていないものもある。そもそも、西鶴の諸作品は、会話中心の小説ではない。全体的に、あまり理屈を述べてはいない。あるいは、登場人物の言動を説明しきらない。

○近松門左衛門の浄瑠璃作品からの用例

＊岩波・日本古典文学大系（旧）『近松浄瑠璃集（上・下）』より。ただし、悉皆的に採録しているわけではない。

上２２（曽根崎心中）

こな様それでも済もぞいの私病になるわいの。嘘なら これ此の痞を見さんせと。手を取っての懐の打恨たる口説泣。ほんの。女夫にかはらじな。男も泣いて「オ、道理〳〵、さりながらいうて苦にさせ何せうぞいの。此の中おれが憂き苦労。盆と正月其の上に。十夜お祓煤掃を一度にするともかうは有るまい。

＊道理（義理）を受け止めた上で、それには収まらない何かを訴えかける決まり文句。西鶴には見えないが、近松か

らの影響であろう、八文字屋本にはある。

上２９（曽根崎心中）

なつかしの母様やなごりをしの父様やと。しやくりあげ〳〵。声も。惜まず泣きければ夫もわつと叫入り。流涕こがるゝ心意気理せめてあはれなれ。

＊お初と徳兵衛、死ぬ間際に父母を思い出して。理屈よりもすでに感情に訴えている。

上７４（心中重井筒）

男男〔男同士〕の恥よりも隠しても隠したい。女同士に恥を見せ男は寝取られ寝間帳台は見さがされ。阿呆の数々よみつくされこれでも男の可愛いは。さてもいかなる因果ぞや今日の事が隠居〔実父の宗徳〕にへ聞え。私は親に叱られながら。咎を負うてゐる心。人間らしい気があらば三十日の一月を。せめて三日はろく〳〵に寝物語もあれかしと。心一ぱい理をせめて。情も。深く口説泣く千々の。思ぞあはれなる。徳兵衛一念発起して。ハッアあゝ誤った〳〵。悪人とも業人とも盗人とも騙とも。我ながら重罪人今までもそなたに恥ぢ。止めう〳〵と思ひしが是程の瀬戸がなうてうか〳〵と尽した。我一人思切ればそなた子供隠居のため。兄貴の身上我が身のため房めが後の為もよい。そこを知らぬ身でもなし。明日は伊勢の御縁日。今宵の月に蹴殺され三世の諸仏の御罰を受け。二人の親に冥途から睨殺さるゝ法もあれ。ふつつと思切つぞ。

＊妻お辰は、夫徳兵衛がお房にいれあげているのを訴える。「心一ぱい理をせめて。情も。深ふかく口説泣く」と、道理と感情とが並行している。なお、この訴えにより徳兵衛は「義理に詰まった女房のせりふ」とも言って感じ、改心するのだが、しかし、この改心を隠居に告げに外へ出たとたん、お房のことが気に掛かって、お房のもとへ行ってしまうという不確定性が不気味である。

上８４（心中重井筒）

元より理を持つ女ども。理屈を詰めて恨泣。いかな張良樊噲でも道理に向ふ矢先はない。

下４２（出世景清）

景清も涙をおさへ「頼もしの心底や。人は種姓が恥づかしし。子中をなせし阿古屋めや男の訴人をしたりしに。御身〔熱田の小野姫〕は命に代らんとは頼もしいや嬉しやな。さりながら父大宮司の御事心もとなう覚ゆれば。御身は是よりとう〳〵帰り菩提をとうてたび給へ」と。鬼を欺く景清も。不覚の涙を流しける。道理せめてあはれなり。

＊世話物・時代物に関わらず、これらの用例は多い。一作品に一回は出てくる感じである。

［＊まとめ］近松の劇は会話が多い。会話の調子を記述する語は《理を責める》以外にも多彩である。

《理を責める》ことの三要素。論理的に話すことで、①相手が自分の論理に服する。反論できず黙る。恥づかしくなる。②納得して落ち着かせる。③相手の感情（怒り、悲哀）に訴える。

③に関して。近松作品の魅力、人間像として、理に従い義理を立てようとする人間の美しさ、健気さがある。《恥辱を雪ぐ》、《一分を立てる》の要素。理と情とは対立しない（後述）。

○八文字屋本の用例

汲古書院『八文字屋本全集』（全23巻、および同索引二〇一三年四月刊行）による。悉皆的には採録していない。順不同、語彙毎に並

べた。南嶺よりも其磧を重視した。

［＊まとめ］会話文は多く、調子の記述も語彙的には多彩。ただし、ストーリーの複雑さが優先されるのみで、人物が軽く浅い。深みがない。

○義理詰め

①578－18　遊女懐中洗濯（推定其磧、八文字屋板）

今迄はわしもアノかくしておりましたが。去役者衆にほれられ。義理づめになつて。たがいにないせう念比いたします。

＊「義理のために、そうせざるをえなくなること。義理ずく」角川。

②280－01　傾城禁短気（自笑、其磧実作・八文字屋板）

さすが所から二本さす客にもまれ給ふほどありて。義理づめのいひほどきに。丸七も至極せられ。

＊遊女の応対。遊郭での会話。

⑧401－02　舞台三津扇（其磧ほか・八文字屋板）

今迄はわしもアノかくしておりましたが。去役者衆にほれられ。義理づめになつて。たがいにないせう念比いたします。

＊同文表現

⑩370－上10　富士浅間裾野桜（其磧・八文字屋板）

恩愛の中垣いふにいはれぬ親子の義理詰

＊目録の文言。

⑪499－15　けいせい哥三味線（其磧・八文字屋板）

ふしやうながら床へ入てからいんで下さんせとはなさねば。新兵へこれには肩こして。義理詰ニ成ていやがならず。いかにも尤成ほどねませふ。さあござれと。つれて床へ入ば。

＊好色物。

⑫040－04　那智御山手管滝（其磧・八文字屋板）

子迄出来た中で。そはれぬやうに義理づめに成て。あふても他人むきで。

⑱265－02　曽根崎情鵲（自笑・其笑、南嶺実作C、八文字屋板）

長蔵それ気を付よかくれしのびても出ば出られんなれども。此様におもふ久兵衛を久兵衛とおもはゞ。ことばをたてゝ内にいてたもと義理づめなるいひぶん。徳兵衛も返とうさしつまり居たりける

○道理にせまる

⑮264－12　花襷巌柳島（自笑、南嶺実作、八文字屋板）

与五郎も道理にせまり。

⑱193－11　勧進能舞台桜（自笑・其笑、南嶺実作、八文字屋板）

しかるに御前に是を押取にもらひ給ひては孝行にもはづれ給ふべし。只かへすぐ〳〵も御ためと申すは此事。右の女は拙者にくだし給るべし。幸婦妻なければ范蠡が跡を学び給はんといへば。蔵人も道理にせまり。さま〴〵にくどひても帯紐とかぬ美人は。焼物で作た饅頭も同前と。いかにも望にまかすべしと。呼出してひきわたせば。

＊感情の叙述はない。

⑱501－07　盛久側柏葉（其笑・瑞笑、南嶺実作、八文字屋板）

維盛卿をたすけらるゝが理の当然と。事を分てのぶるにぞ。さしもの盛久道理にせまり。

○道理にせめらる

⑩021－15　開分二女桜（其磧・八文字屋板）

不忠不孝の汝らを。勘当するがひがことかと。猶々いか

りつよければ。二人は道理に責られて。一言の返答も。泣より外の事ぞなき。

○道理につまる

⑬103－07　略平家都遷（其磧・菊屋七郎兵衛板）

そつちを変改するやうに。思案をしておかしやれと。不興気にいひければ。左衛門も道理につまり。

○道理につめらる

⑪451－18　楠軍法鎧桜（其磧・八文字屋板）

かまくら殿が情なければ。こな様は其情ないいひつけを守り給ふからは。情の道は露程も御存あるとはいわれまいと。一句の道理につめられて。

⑮317－10　忠盛祇園桜（自笑・其笑、南嶺実作、八文字屋板）

さしもの源五兵へ道理につめられ。返答なく。ヲ、道理〳〵去ながら。立身したには段々わけの有事。

○道理にふくす

⑧025－03　風流宇治頼政（其磧・江嶋屋／八文字屋相板）

入道道理にふくし給ひ。

⑪046－02　善悪身持扇

一時の栄花に千とせをへたる心ちいたせしと申ければ。長者道理に伏して。

○道理をせめる

①028－07　けいせい色三味線（推定其磧、八文字屋板）

やうすよく旦那の一ぶん立やうにして此くぜつまいおさめ給へ。さもなくては百年たつてもすまぬ事と。道理をせめて申せば。

＊長谷川注「理詰めで」

⑱356－13　彩色歌相撲（其笑・瑞笑、南嶺実作、八文字屋板）

親王かさねてさればの事。やまと哥は恋を本とす。色にふければ哥のさがるといふ本文ばし候か。と道理をせめてたゞし給へば。

⑱387－03　彩色歌相撲（其笑・瑞笑、南嶺実作、八文字屋板）

ひとつは天下みだれぬためと道理をせめてたのみしわが忠義にやめでぬらん。

○道理をわける

⑰486－18　阿漕浦三巴（自笑・其笑、八文字屋板）

うろたへたる所存かなと。道理を分てなだむれば。

○道理づくめ

⑮271－13　花襷巌柳島（自笑、南嶺実作、八文字屋板）

与五郎に一分捨させぬやうに。此方からいとまをとれといふて。道理づくめニ納得させて。いなしやつたゆへ。あかぬわかれは覚悟してゐれ共。

○理にをれる

⑪163－06　風流東大全（其磧・八文字屋板）

錦木は宮城野が今の言葉の理にをれて。面をあかめ恥しや。

○理にくらからず

⑦295－03　義経倭軍談（其磧・鶴屋／八幡屋／菊屋板）

貞女の道を守るは一身の為なり。三人の若が命を救ひて亡夫の怨を謝し源氏の家を再興するは莫太の功。千万人の為なり。邪僻淫乱にして貞節の道を破るにあらずと女ながらさすがは源家良将のみだい所ほどあつて理にくらからず。大行は細瑾をかへりみずと後藤三郎が諫にまかせ。容をつくろひ粧ひをなして清盛公の妾となつて六波羅に入玉へは。

＊理に暗からず。道理を分かっていること。常盤御前。

⑰387－10　其磧諸国物語（其磧、菊屋喜兵衛板）

理にくらからぬ。小文才もある人なれば。

○理に責められ

⑱２５６－１３　曽根崎情鵲（自笑・其笑、南嶺実作C、八文字屋板）

此両人めを御代官所へ願ひ。こなた様の身のなんぎをもすくいませうと涙にくれてかたりければ。おはつも理にせめられ徳兵衛も出るにでられす。

⑱２５９－１５　曽根崎情鵲（自笑・其笑、南嶺実作C、八文字屋板）

徳兵衛様にあふがうれしさばかりなるに国さんがいへゆかんしていつあふ坂の山見えず。はなちはやらじとなきければ。野沢も恋路の理にせめられ。いふべき詞あらざれば。

○理につまる

⑨４５９－１７　頼朝鎌倉実記（其磧・八文字屋板）

梶原は当前の理につまり。言葉もなくもみ手してぞゐたりける

○理にふくす

⑩１３１－１４　記録曽我女黒船（其磧・八文字屋板）

泪をながし事を分てのたまへば。祐成は理にふくし。現世の母の詞にそむき。未来の父への敵討て手向ても。本意ならぬ事といひ。殊更厚恩の養父の難儀をかへりみぬは。犬猫同前。

⑩１５５－１０　本朝会稽山（其磧・八文字屋板）

与所ながらの耳訴詔頼朝殆理にふくし。伏木を頼みてかくれしものを殺しては。助命木の威徳なし。

⑪２３８－０５　奥州軍記（其磧・八文字屋板）

血気にはやる景政も。理にふくして。もへたつやうな心しづまり納得し。

⑰２０９－０６　弓張月曙桜（自笑・其笑、南嶺実作、八文字屋板）

竹熊も理に伏し。

○理を責む

⑲０５７－０５　十二小町曦裳（其笑・瑞笑、南嶺実作、八文字屋板）

急度心を改め。小町事をおもひきるべしと。理をせめて申ければ。黒主か声にておぼしめしのだん〳〵。父の慈恩とは存たてまつれども。

＊父山主が子黒主に改心を説くが、黒主はかえって謀叛をすすめる。

①５０５－１３　遊女懐中洗濯（推定其磧、八文字屋板）

只はりあいづくの名聞〔面目、評判、見栄〕計で。御しんじつなされかたとはおもひませぬ。かふなく共どふぞひそかにお手に入やうな仕様模様もあらふのに。若い大じんかなんぞのやうに。まだ角がとれませぬぞや。たしなまんせと理をせめて申さるれば。半留魂にこたへ尤〳〵是はほんに浮気のさた。おいやる通り名聞じや。

＊遊郭での例。

⑧１８３－１０　女曽我兄弟鑑（其磧・江嶋屋／八文字屋相板）

しかる時は父亡霊も草の陰にて。存念はれて悦び給ふべし。殊更いもとのおてうにも此事をしらせ。兄弟一所に本望をとげんとは思はぬかと。段々理をせめ制しとゞめければ。朝倉やう〳〵納得して。

⑨１３０－０５　芝居万人葛

さいはひ今度私宅にて。役者目利講を取むずび。京中の男女僧俗此道に。すこしも心がけのある人〳〵をまねきあつめ。諸評を聞てくだんの俵の評口をひらき。理をせ

めたる新評判をいひきかせば。

⑪２３８－０５　奥州軍記（其磧・八文字屋板）

何時でも引気な弥三郎にあらねば。いつ成共相手に成て勝劣を致べし。先今日は穏便にして帰られたらよからふと思ふが。何と思ひ給ふぞと。理をせめていひければ。血気にはやる景政も。理にふくして。もへたつやうな心しづまり納得し。

＊気持ちが静まる。

⑭２４８－０７　其磧置土産（其磧、安井嘉兵衛・毛利庄太郎板）

伝へ承る。越王勾践は呉王の不浄を嘗て。会稽の恥を雪められ秦の相国張禄は。廁の中に尿を蒙りてたに。遂には魏斉が怨を報ぜし例もあり。当前の小き恥辱に。大望をかへられるとある。御心底こそ浅ましけれと。理をせめて諫めければ。扇介殆誤り入て。若気の至にて。

⑮２４５－０１　花襷巌柳島（自笑、南嶺実作、八文字屋板）

惣司に仰付られし。狭崎軍蔵様。佞悪強慾の御方なれば。随分音物を送られて。無事に御つとめあらんこそ。忠孝の二つにも叶ひ申べしと。理をせめていさめけるゆへ。かれめがやう成愚人に。又しても賄を納るゝ事。武気のあるものゝ心よからぬ事なれ共。いか様その方がいふ通。事を好むは武門の本意にあらず。其方にまかすとあるに付けて。俄に巻樽一荷。干鯛一箱は表向。金三枚ひそかにつゝみて。此度御堅固に御帰国の祝儀とて送りければ。

⑲０３３－１２　十二小町曦裳（其笑・瑞笑、南嶺実作、八文字屋板）

理をせめていへば浅茅も詞なく。

○理をただす

⑧１８１－０８　女曽我兄弟鑑（其磧・江嶋屋／八文字屋相板）

真左衛門様とやらとあね様と。一夜成とも夫婦じやとおもはしまして。そはしてしんぜさせらるゝが道にては有るまじきやと。理をたゞして申ければ。瀬平次手を打。あつはれそちは身が女房ながら賢女といふもの。

⑩１５５－１８　本朝会稽山（其磧・八文字屋板）

然上は姫君様は。我君〔頼朝〕の御息女とは申がたし。御勘気とある上は。親子の御縁はきりたれば。をんあいのいつくしみによつて。御助なされしとは。誰人が申べき。殊に女は重罪宥免ある法なれば。御赦免ありとて。政道の妨依怙ひいきの沙汰はこれあるまじ。一つは君御寿命長遠の御祈祷。放生供養と思召。両人を御助なさるべしと。理を正して申さるれば。御機げん限りあらずして。

○理を立つる

⑱０８５－１５　賢女心化粧（其磧、鱗形屋・銭屋庄兵衛・菱屋治兵衛板）

此家の金銀はどふせふと儘じやと。思はせまいための禁と。又は嫁の心ざしを見やう為に。そなたへかくして頼し事なりと。理をたてゝいはれければ。

○理を尽す

②２３６－１５　けいせい伝授紙子（自笑、其磧実作、八文字屋板）

理をつくして異見すれば。

＊大望を持つ者は計略であっても悪所通いをしてはならぬとの、大岸宮内の教えを、鎌田が大岸力太郎に異見する。

⑥０８４－０３　名物焼蛤（未詳、推定八文字屋板）

御機嫌にもかまはず一図の諫言理をつくしてぞ申されける。

＊時代物、間接話法

⑦３７３－１２　花実義経記（其磧・鶴屋／八幡屋／菊屋板）

シヤすいさんなる過言あたまへしに跡にのこれと権柄にもいひつくるもしつたれ共弟をめぐむ心ふかく。気を補ひ理をつくしていひきかすに承引せぬのみならず。兄にむかつてくわんたいなる雑言。勘気などいふなまぬるいせんぎにあらず。只今手にかけ二つにするがさあ返答はと刀の柄に手をかけければ

＊佐藤次信、忠信の兄弟が喧嘩している。

⑯２６０－１１　刈萱二面鏡（自笑・其笑、南嶺実作、八文字屋板）

詞をつくし理を尽し。

⑰３７０－０５　其磧諸国物語（其磧、菊屋喜兵衛板）

然る上は御双方御野心を。さしはさまるゝ事もあらねば。御和睦ねがひ候と。理を尽して申しければ。与藤次が詞にや恥けん。帯刀は怒をやめ。

○理をつめる

⑮３４６－０１　忠盛祇園桜（自笑・其笑、南嶺実作、八文字屋板）

忠盛様が見へたり共。是切で隙取て下されとの願ひ。ソリヤそなたの我儘といふ物。是迄の御恩をいくばくの事と思やるぞと。理をつめて様〳〵に異見いたせ共。御存の通アノ辺に奉公いたしたには。似合ぬかたい所のある生れつきゆへ。気をのぼしてはと。

⑲２９１－１６　義貞艶軍配（其笑・瑞笑、南嶺実作、八文字屋板）

理をつめてとき聞せば。

○理をならぶ

⑦３８６－０７　花実義経記（其磧・鶴屋／八幡屋／菊屋板）

全く恨みに思ふまじと理をならべのたまへは重忠一々聞得られ

＊理を並べている。義経と重忠の問答

⑭２６４－０５　其磧置土産（其磧、安井嘉兵衛・毛利庄太郎板）

憚ながら堪忍いたしにくき場を。今日迄相延し候は。私の一命を殿様へ拝領の願ひに伺公いたせしと。理をならべ申ければ。家老中至極に存せられ。一々理にあたつて尤ながら。同じ家中の人々討果すと有事を聞て。

○理をのぶる

⑮３７６－０３　龍都俵系図（自笑・其笑、南嶺実作、八文字屋板）

四相をしると世にも風聞する。我兄藤太殿を。弟としてさむせらるゝは。指当つて孝悌の道にそむけりと。理をのぶれば。小藤次近藤五そりを打て。

［＊まとめ］（再説）

八文字屋本の場合、理はストーリーの複雑さ（心底明かし）などのために使われていて、なるほどと納得される知的理解へは接続するが、（近松のようには）感情へと接続していかない。知的理解は既存の論理（道理、近世的道徳）に従うものである。

理（道理）どおりに動く人間は、ある種の機械である。

○中村幸彦「文学は人情を道ふの説」『近世文芸思潮攷』。（昭和26年）

そもそも、人情とはどういうものか。この中村論文は、朱子学的な人間了解に対して、伊藤仁斎の人間観は、人情の発露を肯定するものであり、これが元禄文学の基本理念と通底しているものがあることを指摘した画期的な論文である。

……この書〔林羅山『性理字義諺解』〕を主として朱子学の人情の概念を簡略に求めてみる。

朱子学にあっては一身の主宰たる精神を心と称する。この心に体

用の二面がある。衆理をそなえて若然として動かぬものが体、外界の万事に応じて動くものが用である。心の体を性、心の用を情と称する。又、心の動が情、静が性と云ってももよい。そして情と性とを心が統轄する。性と情との関係を見るに、心の裏面にあって未だ発動しないもの〔未発・潜勢態〕が性、事物にふれて発動してくる〔已発・現勢態〕もの即ち情と解する。しかるに、性には本然の性と気質の性とがある。宇宙に充満する天地人間万物に共通した理があって、その理が人間にやどった場合が本然の性である。これに対して人間に理がやどる時、時所の相違によってあらわれ方が違って、何に於いても一様であるべき理が、各々相違したあらわれ方をする。これが気質の性である。未発の性が、既に発して情となる時、本然の性のみが動く時はその情、悉く善となり、気質の性に従う時にはまま悪となるものである。以上の説によれば、朱子学の精神の構造は次の如くになる。

理＝心
- 体 ── 本然之性・気質之性
- 用 ── （善）情（悪）

［＊まとめ］宇宙万物の真理＝理は人間の心において性として宿る。性に本然の性と気質の性と二種類を考えることで、人間の善（本質）と個体性（実存）とがともに保証されている。これが「性即理」と称される朱子学の人間理解である。これに対して、仁斎は性の二面性を認めない。いわゆる気質の性のみを認める。

……仁斎が孔孟の意味血脈を、二書〔論孟〕より帰納的に得た結果では、「性ハ生也。人ノ生ルル所、加損無キ也」〔性とは、生まれたまま加減することのないものをいう〕で、性とは梅がすく柿が甘い如く、朱子学で云う気質の性のごときもの唯一つであって、二つはない。もし二つの性ありとすれば、孔子の「性相近也習相遠也」〔陽貨編〕と孔子の血脈をつたえたはずの孟子の性善説との間に矛盾が生じる。二つにわける朱子の説は老子によったので、孔孟の本旨ではない。「情は性の欲也。動く所あるを以て言ふ。故に性情を以つて並称す」るのであって、目の美色、耳の好音を欲する情慾、父の子の善を欲し、子の父の寿を望む人情、善を好み悪を憎む天下の同情の如きがこれである。心との関係は、「凡そ思慮する所無くして動く、之を情と謂ひ、纔かに思慮に渉れば則ち之を心と謂ふ」の如くであり、云わば一つのもののあらわれ方の相違で相違で称を変えたと見ているようである。心をも、「心ハ人ノ之を思慮運用する所、本ヨリ貴カラズ、亦賤シカラズ。凡ソ有情ノ類、皆コレ有リ。故ニ聖人は、徳ヲ貴トシ、心ヲ貴トセズ。」と各別高きに置いていないのもこの故である。

［＊まとめ］仁斎は、体－用という対比を使わない。体（未発）－用（已発）という対比をわざわざ立てるまでもなく、未発なるものは無い。個別的・実存的な性があり、それが常に欲求作用として動き変化している。それが情なのである。真や善は、一元的な欲求作用において現われているようである。また、心は「思慮運用」の謂いであり、これが真や善の根拠となるのであろうか。

また、中野三敏氏は近年、「性即理」の朱子学に対して「心即理」の陽明学こそが近世日本の中心的思想だったと言う。仁斎が陽明学の影響を受けていることは江戸時代から言われてきていた。ただし、思想における影響を、文学のような典拠論のごときに考えてはいけない。思想家はあくまでオリジナルを目指しているのである。プレテキストでテキストを解釈しては誤るだろう。かつ、そもそも、精神作用において「理」のごとき、論理的正しさや実践的善などの

根拠を認める哲学（合理論・プラトン、デカルト、カント）と認めない哲学（経験論・ソフィスト、ロック、ヒューム）との対立は古今東西に普遍的なものである。また、現実的には、哲学以前に日本では古代から正しさや善を精神の基本作用とは認めて来なかった。日本において精神は浮動するものだった。ことさらに陽明学のみを特権化する必要はないと思われる。戯れて曰く、儂（わし）もまた陽明左派かと維禎言い。また、妾（わらわ）まで陽明左派かと式部言い。

李卓吾など陽明学左派の思想が近世に享受されたのは、論証される通りなのだろう。が、それによって人間の迷いや悪が肯定されたわけではあるまい。人間に迷いがあり、堕落した悪の心を持っていることは、そんな思想とは無関係に、人はみなむかしから知っている。人間の迷いや悪を描く文学は理論の後ろ盾無しに成立している。

ちなみに、本居宣長が注目した「物のあはれを知る」という人間の情的なあり方は、抽象化された人間観でも文学理念でもなく、浄瑠璃等の近世俗文芸に見られる庶民的な感情であることを論じたのが日野龍夫の論文である（「宣長と当代文化」『宣長と秋成』筑摩書房、一九八四年）。日野氏は浄瑠璃と宣長の思想に共通性を見たが、宣長の思想を元に浄瑠璃作者が作劇しているなどとは言わなかったのは賢明である。

○原道生「虚構としての義理」講座日本思想３ 秩序、東京大学出版会（１９８３）

元禄文学と仁斎の思想とにおいて肯定されて描かれた人情は、義理に対立するものではない。

……そして、さらに「世間的道義」としての「義理」が外的拘束力となって「「人情」の自然の流露を抑圧し、阻碍し、そこに「うれひ」や「あはれ」を呼び出」（重友毅）してくることになるという、第二次大戦前の近松研究において定説化するに至っていた周知の図式も、究極的には右の逍遙ら〔佐藤迷羊・島村抱月〕の見解の延長線上に位置づけられるものに他ならないことはいうまでもないだろう。

ところで、こうした形で定着を見ていた義理人情観は、戦後、廣末保氏の近松論を直接の契機として、一つの大きな変質を遂げることとなった。即ち、同氏にあっては、近松の描く「人間らしい」主人公たちがすべて「義理」「人情」の双方を弁えている人物として設定されているという事実の認識に基づいて、近松の「義理」は、それまで考えられてきたような「人情」に対立するものではなくて、むしろ、町人である主人公たちの人間性を保証する真摯な内的倫理として構想されているということ、およびそのような「義理感」を強く内在させていることによって人間的たり得ている彼らが、他ならぬその「義理」のためにかえって窮地に追い詰められることを余儀なくされてしまうという状況を悲劇として捉え得ているところにこそ近松の優れた独自性が認められる、といったことなどについての指摘がなされているのだが、ここに新しく提示せられた「義理」と「人情」とが「共に人間らしさを形成する同じ盾の両面としてつかまれている」という同氏の基本的な見解は、それ以後、なお現在に至るまで、近松の「義理」を論ずるに際しての共通の前提として広く承認されたものとなっているのである。（後略）

［＊まとめ］義理と人情に関する戦前の対立的立場と、戦後の相互浸透的な立場。この違いは、心の二面的な働きを、二元的な別の作用と考えるか、一元的な作用と考えるか、その違いに等しい。朱子学の心理解と、伊藤仁斎あるいは陽明学の心理解との違いとパラレルである。

○坪内逍遙『小説神髄』（岩波文庫）

人間には感情があることを肯定する思想。あるいは、人間の活動において、感情無しでは成立しないこと。これらの考えは、理論の後ろ盾無しで肯定されているのである。

とは言え、心が一元的であろうが、二元的であろうが、ただ泣いたりわめいたりさえすれば人間的なのだろうか。それは単に泣きわめく機械ではないのか。理と情をめぐって、あらためて坪内逍遙の議論を確認しておこう。

小説の主眼

小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ。人情とはいかなるものをいふや。曰く、人情とは人間の情慾にて、所謂百八煩悩是れなり。夫れ人間は情慾の動物なれば、いかなる賢人、善者なりとて、未だ情慾を有ぬは稀れなり。賢不肖の弁別なく、必ず情慾を抱けるものから、賢者の小人に異なる所以、善人の悪人に異なる所以は、一に道理の力を以て若しくは良心の力に頼りて情慾を抑へ制め、煩悩の犬を攘ふに因るのみ。されども智力大いに進みて、気格高尚なる人に在りては、常に劣情を包み、かくしてその外面に顕れざれば、さながらその人煩悩をば全く脱せし如くなれども、彼れまた有情の人たるからには、などて情慾のなからざるべき。哀みても乱るることなく、楽みても荒むことなく、能くその節を守れるのみか、忿るべきをも敢て忿らず、怨むべきをも怨まざるは、もと情慾の薄きにあらで、その道理力の強きが故なり。斯かれば外面に打いだして、行ふ所はあくまで純正純良なりと雖も、その行ひを成すに先きだち幾多劣情の心の中に勃発することなからずやは。その劣情と道理の力と心のうちにて相闘ひ、道理劣情に勝つに及びて、はじめて善行をなすを得るなり。彼の神聖にあらざる以上は、水の低きに附くが如くに善を修むる者やはあらむ。いくらか迷ふ心あるをば、よく道理をもて抑ふればこそ賢人とも君子ともいはるるなれ。初めよりして迷ひなくんば、善をなすとも珍しからず。君子、賢人などといはむは、なかなかにおろかなるべし。されば人間といふ動物には、外に現るる外部の行為と、内に蔵れたる思想と、二条の現象あるべき筈なり。而して内外双つながらその現象は駁雑にて、面の如くに異なるものから、世に歴史あり伝記あいて、外に見えたる行為の如きは概ね是れを写すといへども、内部に包める思想の如きはくだくだしきに渉るをもて、写し得たるは曽て稀れなり。この人情の奥を穿ちて、賢人、君子はさらなり、老若男女、善悪正邪の心の中の内幕をば洩す所なく描きいだして周密精到、人情を灼然として見えしむるを我が小説家の務めとはするなり。よしや人情を写せばとて、その皮相のみを写したるものは、未だ之れを真の小説とはいふべからず。その骨髄を穿つに及び、はじめて小説の小説たるを見るなり。和漢に名ある稗官者流は、ひたすら脚色の皮相にとどまるを拙しとして、深くその骨髄に入らむことを力めたりしも、主脳となすべき人情をば皮相を写して足れりとせり。豈に憾むべきことならずや。稗官者流は心理学者のごとし。宜しく心理学の道理に基づき、その人物をば仮作るべきなり。苟にもおのれが意匠を以て、強ひて人情に悖戻せる、否、心理学に戻れる人物など仮作りいださば、その人物は已に既に人間世界の者にあらで、作者が想像の人物なるから、その脚色は巧みなりとも、その譚は奇なりといふとも、之れを小説とはいふべからず。物にたとえて之れをいはば、機関人形といふ者に似たり。匆卒にして之れを観れば、さながら夥のまことの人が活動なせるが如くなれども、再三熟視なすにいたれば、偶人師の姿も見え、機関の工合もいとよく知られて、興味索然たらざるを得ず。小説もまた之れにひとしく、作者が人物の背後にありて、屡々糸を索く様子のあらはに人物の挙動に見えなば、

たちまち興味を失ふべし。試みに一例を一例をあげていはむ歟、彼の曲亭の傑作なりける『八犬伝』の中の八士の如きは、仁義八行の化物にて、決して人間とはいひ難かり。作者の本意も、もとよりして、彼の八行を人に擬して小説をなすべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無欠の者となして、勧懲の意を寓せしなり。されば勧懲を主眼として『八犬伝』を評するときには、東西古今にその類なき好稗史なりといふべけれど、他の人情を主脳としてこの物語を論ひなば、瑕なき玉とは称へがたし。その故をいかにとならば、彼の八主公の行ひを見よ、否、

行為はとまれかくまれ、肚の裏にて思へる事だに徹頭徹尾道にかなひて、曽て劣情を発せしことなし。矧や一時瞬間といへども、心猿狂ひ、意馬跳りて、彼の道理力と肚の裏にて闘ひたりける例もなし。よしや堯舜の聖代なればとて、かかる聖賢の八個までも相並びつつ世にいでむこと殆ど望みがたき事ならずや。蓋し八犬士は曲亭馬琴が理想上の人物にて、現世の人間の写真にあらねば、この不都合もありけるなり。さはあれ馬琴は凡ならざる、よく巧妙の意匠をもてして、その牽強をば掩ひしかば、読者は毫もこれをしらず、よく人情をも穿ちたりとほめ称へたるは誤りならずや。斯ういへばとて、『八犬伝』を小説ならずといふにはあらねど、今証例に便ならむが為に、しばらく人口に膾炙したる彼の傑作を引用せしのみ。

（岩波文庫、改版　51Pから）

［＊まとめ］既存の論理・法則に従って生きている人間は、化物である。

ただし、逍遙の議論が今読んでも素晴らしいと思えるのは、理（論理）と情（人情）を対比させているだけでなく、「迷ふ心」を言う点である。泣きわめく等の感情表現もまた、泣きわめく機械に堕する可能性がある。

○『小説神髄』に絶賛されて引用される宣長『源氏物語玉の小櫛』

さて物語は物のあはれを知るを旨としたるに、そのすぢにいたりては儒仏の教へに背けることも多きぞかし。そはまづ人の情の物に感ずる事には善悪邪正さまざまある中に、道理にたがへる事には感ずまじきわざなれども、情は我れながら我が心にも任せぬことありて、おのづから忍びがたきふし有て感ずることもあるものなり。源氏の君の上にていはば、空蝉の君、朧月夜の君、藤つぼの中宮などに心をかけて逢ひたまへるは、儒仏などの道にていはむには、世に上もなきいみじき不義悪行なれば、外にいかばかりの善き事あらむにても善人とはいひがたかるべきに、その不義悪行なるよしをばさしもたてて言はずして、只そのあひだのもののあはれの深きかたを返す返すかきのべて、源氏の君をば主と善人の本として、善事のかぎりをこの君の上にとりあつめたる、この物語の大旨にして、そのよきあしきは儒仏などの書の善悪と差異あるけぢめなり。

［＊まとめ］ここでは善悪正邪に収まらない、やむにやまれぬ心情を言っている。

○ベルクソン『物質と記憶』第一章、１８９６年（竹内信夫訳・白水社版２０１１年）

［＊まとめ］「迷ふ心」とは、未決定性 indeterminacy と一般化できる。生物において、神経系が進化し複雑になって、反応の選択肢が増えることは、躊躇や迷い、遅延を可能にする。意識（心）の発生がこれだ、という。そして、物質性が科学法則（未来が決まっている）に従っているとすれば、生命性は科学法則に従わない（予測不能な）

反応を返すことが可能になる。

神経系〔脳・中枢神経・末梢神経〕の働きは、〔外界の〕刺激を受け取り、〔身体内の〕運動機構を組み立て、与えられた刺激に対して、できるだけ多くの運動可能性〔運動の選択肢〕を提示することにある。神経系が発達すればするほど、運動機構はますます複雑化してゆき、それとともに外的空間内にあるますます多くの、ますます広範囲の事象がその複雑化した運動機構に関係付けられてゆく。こうしてわれわれの行動の自由度は増大する。まさにそこにこそ神経系のますます精緻に完成されてゆくことの本旨が存しているのである。しかし、神経系の構築が、動物の進化系統の最初から最後まで一貫して、ますます必然性の拘束から自由になってゆく行動のために推進されているのだとすれば、知覚もまた、それ自体が神経系構築の進化に並行しているのだから、その全過程は行動に向かっているのであって、純粋認識〔思弁的認識、知的関心〕に向かっているのではない、と考えなければならいのではないだろうか。そうなると、この知覚というものがますます豊かになっていゆくことそれ自体も、生命体が周りの事物に対して行う行動において、その選択の未決定範囲がますます広がることの象徴的指標と見るべきではないのだろうか。それならば、この未決定性こそ本当の原則であるとみなし、そこから出発してみることにしよう。そして、この未決定性を措定したうえで、意識的知覚の可能性、さらには必然性が、そこから演繹できないかどうかを考察してみることにしよう。（中略）

まず注目しておきたい点は、厳密な一つの法則によって、意識的知覚の空間的延長〔意識のおよぶ範囲〕と生命体が行いうる行動との内的緊張とが密接な関係にある、ということだ。もしわたしの仮説が根拠のあるものとするならば、意識的知覚が現われるのは、生命体が請取った刺激が必然的な反射運動に継続されなくなったその瞬間においてである。原初的な生物の場合、確かに、刺激の発生に関係する事物との直接的接触が必要であろうが、その場合には反射運動は間髪を置かず直ちに発動される。そういうわけで、下等な生物種の場合、触覚は受動的であると同時に能動的なのである。（中略）しかし、反応がより不確実なものとなり、躊躇・思量の時間が長くなるにつれて、それと同時に、関係する事物の作用が生命体に感受されるまでの時間間隔も長くなるのである。視覚や聴覚によって、生命体が関係する事物の数はますまず増大してゆき、ますます遠くにある事物からの影響を、その生命体は蒙るようになる。（中略）知覚の射程は、知覚に続く生命体の運動のこの未決定性に正確に対応していると見ることができよう。それを要約すれば、次の法則が得られるだろう。知覚が自由にできる空間と、行動が自由にできる時間とは、正確に比例している。

○都賀庭鐘『莠句冊』第八話「猥瑣道人水品を弁じ五管の音を知る話」

水金木は定りたる無情の物、其音変る事なし。人は是活動、智を用る物、未来の合べからざることかくの如し。

［＊まとめ］未決定性を言う近世思想の一例（1）。物質は一定不変であるが、生命は未決定である。

○伊藤仁斎『童子問』中（第六五章）

宋儒以為えらく、『一の理の字以て天下の事を盡すべし』と。殊えて知らず天下理外の物無しと雖ども、然れども一の理の字を以て天下の事を断ずべからず。学者一の理の字に拠つて、以て天下の事理を

断ず。議論聞くべくして、之を実に求むるときは、則ち其の悉く中ることを得ず。夫れ古今の終始、得て究むべからず、四旁の窮際、得て知るべからず。近くは諸を身に取り、遠くは諸を物にとるに、凡そ其の形状性情、然る所以の故、皆得て窮詰すべからず。

［＊まとめ］未決定性を言う近世思想の一例（2）。生命も物質もまた、すべての現実は未決定である。物質もまた未決定であれば、そのとき物質から意識（心）が生じる。

○柴田正良『ロボットの心』講談社現代新書２００３年（Ｐ11）

本書のテーマは一言でいうと、ロボットに心がもてるか、ということである。この質問をいきなり大学生にすると、学生の大半はあまり迷いもせずに「Ｎｏ」と答える。そこで、その理由は何か、とたたみかけて尋ねると実にさまざまな答えが返ってくる。曰く、

「ロボットには計算が出来ても、人の気持ちが分かるはずがない」

「ロボットはプログラムされたこと以外のことをする創造性をもっていない」

「ロボットに意識はない」

「ロボットがセンサーをもっていたって、実際に何かを感じることはできないはず」

「ロボットが誰かを愛するなんて考えられないよ」

「心とは人間の本質だ、それをロボットがもったらそれはもう人間だ、だから定義によりロボットは心をもてない、証明おわり」……

そこで彼らの言い分をひとしきり聞いた後で、「じゃ、ドラえもんには心がないわけ？」と反撃（？）すると、彼らは一様にのけぞって、「えっ、そりゃ、ずるいよ」といわんばかりの顔をする。要するに、鉄腕アトムや「スター・ウォーズ」のＣ―３ＰＯや、「ブレードランナー」のアンドロイドや「ターミネーター２」のシュワちゃん扮するロボットなどは、もしそれらが〈本当に〉人工物であって、しかも〈本当に〉ストーリー通りに振る舞ったとしたら、それらに心を認めないのはこれまた変だ、と学生たちも感じているわけである。

［＊まとめ］文学の問題としては、人は無媒介にドラえもんに「心」を見出している。この本での、哲学的なアプローチにおいては、純粋にコンピュータや機械において「心」が可能であるかを議論している。クオリア（感覚質、何かを感覚したときの感じ）を可能にするシステムの可能性（コネクショニズム）、およびクオリアの様々な役割を論じている。

○森山徹『ダンゴムシに心はあるのか』ＰＨＰサイエンス・ワールド新書

［＊まとめ］若手の動物行動学者の著書で、著者の森山氏は自分でダンゴムシを飼育し迷路実験などをさせ、それと同時に「心はあるか」という哲学的問題に取り組んでいる。

ベルクソンは、心（意識）はゾウリムシにもあり、その本体は神経系が作り出す未決定性 indeterminacy だ、つまり、生命体はある刺激に対して反応を返すが、その反応が決まり切っていないことが心（意識）なのだ、と言う。機械は常に同じ反応しか返せない。単細胞の動物も似たようなものであるが、神経系が複雑になれば、反応の選択肢は増えてくる。大脳を典型とする神経系はその複雑さを実現している。ついでに言えば、人間くらいに複雑な動物になると、逆に同じ反応を返すようになれることが大事であり、そのために練習

とか修行とかをするのである。最初は覚束なくても、修行を積めばその動作を「意識しないで」行うことが出来ようになる。つまり、心（意識）とは、点いたり消えたりするものなのだ。

本書は、ベルクソンにまったく触れていないが、こうした理論の流れに位置していることは明らかである。森山氏は端的に「心とは行動の抑制である」という。

また、次のようにも言う。「もしあなたが心の存在を実感したいと思う対象があるならば、その対象から予想外の行動を引き出すために、未知の状況を設定しなくてはなりません。」

これは、フィクションの登場人物に対してどうして人は心を見出だすのかという問題を共有している。

○西鶴『西鶴諸国咄』巻四の二「忍び扇の長哥」（対訳西鶴全集より全文）

屋かた住ひ。気づまりも。上野の花にわすれて。諸人の心玉うきたつ。春のありさま。衣装幕のうちには。小哥まじりの女中姿ほんの桜よりは詠めぞかし。日も暮にちかき折ふし。大名の奥さまめきて。先に長刀。ふたつ挟箱もたせて。高蒔絵の乗物つゞきて。跡より廿あまりの面影。窓のすだれのひまより見へけるに。其うつくしさ。和国美人そろへのうちにもみへず。うか〳〵と付てまはりける。此男やう〳〵中小性ぐらいの風俗。女のすかぬ男也。おもふにおよばぬ。御かたを恋初。跡より行中間にたづねしに。「さる御大名のめいごさま」と。あらまし様子を語すて行く。

さてはと其所をしりて。奥かたへの。御奉公をかせぎしに。よき伝ありて相済。二とせばかり勤しうちに。あなたこなたへの御供申せし折ふし。思ひ入し御乗物に。目をつけけるに。縁は不思義なり。あなたにもいつともなふ。おぼしめし入られ。すゑ〴〵の女に仰付られ。長屋の窓より。黒骨の扇を。なげ入ける。若ひ者中間より見付て。彼半女と心のあるやうに申を。沙汰なしに酒など買て。口をふさぎぬ。

其夜御あふぎひらき見るに。筆のあゆみ。只人のぶんがらにもあらず。おぼしめす事ども。長哥にあそばしける。よく〳〵読て見るに。「我をおもはゞ。今宵のうちに。つれて立のくべし。男にさま替へて。きり戸をしのび。命をかぎり」との御事。此かたじけなさ。身をくだきてもと思ひ定め。其時をまつに。御しらせにたがはず。小者姿にして。御出あそばしけるを。御門をまぎれ出。はやその夜に。かはらけ町といふ所に。よしみの者有。是にしのび。すこしのうら棚をかりて。人しれず住けるに。何の心もなく出たまへば。世を渡るべき種もなければ。御守わきざしを。少の質に置て。月日をおくらるるうちに。またかなしく。男は夜々。切疵のかうやくを売どもはかどらず。後にはせんかたつきぬれば。手なれたまはぬ。すゝぎせんだく。見るめもいたはしく。近所も不思義を立ける。屋敷よりは。毎日五十人づゝ。御ゆくゑをたづねしに。半年あまり過て。さがし出し。大勢とりかけ。彼男は縄をかけて。其夜にせいばいにあいける。

其後姫は一間なるかたにおしこめ。じがひあそばすやうに。しかけ置ても。中〳〵その心ざしもなし。時節うつれば。「いかに。女なればとておくれたり。最後をいそがせ」と。大殿より仰せければ。姫の御かたに参りて。「世の定まり事とて。御いたはしく候へども。不義あそばし候へば。御最後」と申あぐれば。「我命おしむにはあらねども。身の上に不義はなし。人間と生を請て。女の男只一人持事。是作法也。あの者下〴〵をおもふは。是縁の道也。おの〳〵世の不義といふ事をしらずや。夫ある女の。外に男を思ひ。または死別れて。後夫を求るこそ。不儀とは申べし。男なき女の。一生に一人の男を。不儀とは申されまじ。又下〴〵を取あげ。縁を

くみし事は。むかしよりためし有。我すこしも不儀にはあらず。その男は。ころすまじき物を」と。泪を流したまい。此男の跡とふ為なりと。自髪をおろしたまふと也。（終わり）

［＊まとめ］小者と欠落した大名家の姫君は、不義者として家から自害をすすめられて、思いの丈を述べる。「命を惜しんで言うのではないが、私は不義を働いた覚えばない。人間と生まれ、女がただ一人の男を持つことは世のきまりである。あのような身分の低い者を思うこともまた男女の縁の道というものだ。みなも不義ということを知らないのか。夫のある身で外の男を思い、また死別して後夫を求めるこそ、不義とは言うのである。まだ男を持たない女が一生に一人の男を持つのを不義とはいわない。身分の低い者と縁を結ぶことは昔からもあるためしである。私はまったく不義ではない。あの男は殺されるべきではなかった」。姫君は正しく《理を責めている》ように見えるが、さいわいそういう言葉は使われていない。

○金井寅之助「「忍び扇の長歌」の背景」『西鶴考』

姪御の姫の自害を迫られても応ぜず、「世の定まりごと」を批判して、その主張を貫いて尼になるあたり、芥川龍之介や菊池寛などの新理知派の趣きがある。西鶴の素材の処理の一つの方法なのである。実録はこゝで文学となる。

大名や家老や世間は、世の作法にはづれた愛情のふるまいを不義といひ、姫は、愛情の真実にそむくのを不義といふ。さういふ考へ方の、或いは心理の、くひちがひから起る悲劇に、さういふ悲劇を起す人間の心の微妙な動き、或いはあういふものの抒情に、この篇における西鶴の作意の一つがあるのではないか。そこにわれ〳〵は文学的感興を覚える。しかし、同時に若干の不満を覚えないでもない。西鶴は、この場合、その心理のくひちがひの興味を強調しすぎてゐるやうである。これは平素の持論〔人情に対する重圧、そこへの抗議〕を展開するに絶好の場所の場所として筆を走らせすぎたのでもあらうが、そのために、その主張が、強調されてゐるほどの文学的感動をもつて迫つて来ないのである。「世の定まりごと」から人情への重圧と、その重圧に対する人情からの反駁。しかし同時に、また、さういふ外部からの重圧に対して、その必然性を理解して、自己犠牲的にそれに順従するのも人情である。さういふ矛盾葛藤に屡々文学は生れる。この場合、その葛藤の一面が捨てられてゐるところに、浅さを感じさせるのではないであらうか。その一面を捨てざるを得なかつたのは、極めて短篇であるからであり、くひちがひの心理の強調のためでもあつた。咄は多くは短篇であり、咄は多くくひちがひの心理の面白さをねらふ。この場合、簡単に言へば、それは咄のせゐなのである。西鶴の小説に通じて観られる性格の一つである。

［＊まとめ］金井氏は本話にくひちがひ・価値観の対立を見て、その強調のしすぎが作品の浅さになっていると指摘している。外部からの重圧を必然とあきらめて自害したとして、それもまた人情とみて、金井氏は人情の深さを見ているのであろう。本話がそうならなかったのは、くひちがひを喜ぶ短篇・咄であるためだ、と言う。

反抗が浅薄で、忍従が深い、と金井氏は言いたいわけではないだろうと思う。ただし、氏の立論の文脈には不義観の対立があるのではないだろうか。

反論ではないが、極めて現代的な一読者としての私は、本話の面白みを不義観の対立に見ない。私が本話を面白いと思うのは、そもそもこの姫君がよくわからない娘であること。なぜその男を好きになったのかは「縁は不思義」というだけで、何も述べない。「つれて

立のくべし」と言った理由も、何もわからない。しかし最後に大胆に自分の意見を述べ、そして泣く。このあざやかな展開にこそ面白さがある。明確な輪郭を持つように見えて、実はまだよく分からない人物。その姫が、愛する男の死を思いただ泣くのである。「理を責めた」などと簡単に叙述してしまうことなく。理屈も描写も抜きに、ただ泣く娘のいること。省略された記述が逆に人間に深みを与えている例として本話を挙げることができる。

○八文字自笑『善悪両面常盤染』元文三年刊（八文字屋本全集14巻）梗概

西鶴が描き出したようなこうした人間像は、近松の浄瑠璃にはかなりあるように思われる。では、八文字屋本には求め得ないものであろうか。八文字屋本の多くにおいて、理を尽して語り合う人物達はストーリーの複雑さへの寄与だけを目的としているように見える。しかし、例外的に次の例を挙げられるのではないか。以下梗概を示す。

（巻一の一）保元の乱で父為朝を討った不忠ゆえか、平治の乱で敗れた左馬頭義朝は、嫡子義平を信濃へ、郎等等を各々の国へ落とし、美濃国青墓へ。かねて夜叉御前を産んだ馴染みの大炊の長者の娘・延寿は再開を喜ぶ。鎌田兵衛政清とともに捲土重来を期してすぐに東国へ下る。野間の内海の長田庄司忠宗は源家譜代の臣下であり、鎌田兵衛の舅。義朝を歓迎し宴を開く。

源師仲の娘、姉の玉衣は義朝次男朝長の婚約者。しかし、平治の乱で朝長は膝を射られ、波多次郎義通が付いて花園の土民で師仲邸出入りの与茂平を頼み、師仲の屋敷深くにかくまわれ治療。妹の玉琴は、姉にもまして大胆で、平知盛と恋仲である。が、源頼政から嫁にもらいたいとの話が進んでいる。玉琴は困り、知盛に申し越せば、知盛は、兄重盛の子道盛と師仲が和歌仲間ゆえそれをつてに話を付けさすと返事をする。しかし、待っていても事態は進まず、玉琴は清水詣と偽り、六波羅まで行き、腰元に知盛に手紙を渡させる。知盛は慌てて、学問所まで玉琴を連れ行き、道盛を使者に話をまとめる手筈だと言いなだめる。

（巻一の二）その学問所へ当の越前三位道盛が来る。あわてて玉琴を隠れさせ待てば、道盛言うに、源師仲のところから今戻ったが、師仲も平家との縁組みを望んでおるためこのまま結納まで進むかと思われたが、重盛公の仰せとして、師仲は朝敵義朝の子朝長をかくまっているので、婚姻は止めよ、ついては知盛は桜町中納言の娘と結婚せよ、との由。一通り言って道盛は帰る。聞いていた玉琴は、押入れから出てきて自害しようとするのを知盛おしとどめ、欠落してでもそなたと添うつもりと言い、そして朝長の首を差し出すよう父師仲に勧めよ、と言う。玉琴は、朝長をかくまう話は初耳で、急いで帰宅。母に言うに、清水観音の利生で、我が家で朝敵朝長をかくまっているという噂話を聞いた、と。玉琴の追及に母御台も隠しきれずに言う。われは越中前司平盛俊の娘。上西門院の官女たりし時、師仲と馴れ初め夫婦となった。姉玉衣は先腹の子。もし朝長を訴人せば、盛俊ら平家側の入れ知恵と思われるは必定。ゆえに言ってはならぬと玉琴に厳命するのは賢女である。

（巻一の三）玉琴は母に相談しても無駄と知り、自らの手で朝長の首をとらんと、腰元青柳を呼び、居場所をさぐらせる。その夜、闇中に姉玉衣は、朝長をかくまう土蔵に手燭もともさず行く途中、青柳はこれを玉琴と勘違いして、朝長探索の件、急用の文の件を話し、手紙を渡して、人違いにも気づかず去る。玉衣、文を開き見れば、六波羅より役人が来る前に早く討取って差し出せというもの。玉衣肝をつぶし、さては母と玉琴が盛俊と結託し父師仲に訴人を勧める

内談と見て取り、真実の親以上に自分を可愛がってくれていた母なるに、今やそしらぬ体でこんな話を進めていたのかと恨めしく、こうなれば家にいる意味もない、朝長を連れて欠落と思う所へ、中小性の花垣主水。かねてより玉衣に心をかけており、腰元おらんを通じて艶書も送っていた。今は、師仲の命で玉衣を見張っていた、と言う。朝長をかくまうため大声もあげられず、この築山で朝長のためにお百度を踏んでいたのだと言う。主水が戯れかかるところへ、家老花形宮内が出来て、不義者といって主水を縛り上げる。師仲も出てくる。主水は、師仲の命であり、艶書は一度きりの若気の至り、と弁明するが、師仲は怒って不義と決めつけ、玉衣には勘当を言い渡す。宮内は主水を松の木に縛り付け、玉衣を茶亭に連れて行く。

（巻二の一）朝長を治療した医師藪井道滴は平道盛の医者でもあり、うっかり口をすべらせる。平家方は越中前司盛俊と上総五郎兵衛を師仲邸へさし向ける。家老宮内が応対して言うには、平清盛に手向かう気は無く、窮鳥を助けたもの。朝長に言い含め今切腹した、首を渡す、と。師仲も出てき、越中・上総は首級をうけとる。越中盛俊は、朝長の顔は見知っている、首はそのままここで葬られよ、と言う。上総五郎兵衛は、まずは清盛に見せねばと納得しない。宮内は、解釈した我を疑うかと気色ばむ。上総はそれに怖じ気づき、宮内に首を持って六波羅まで来るように言う。そこへ母御台と玉琴が出てきて、母御台は朝長のかくれ場所を平家に知らせるようなことはしていないと言い、潔白の証として自害する。

（巻二の二）邪智多き上総五郎兵衛もふくめ一同感涙。玉琴も姉を思いやって家を出ようとするが、思い留められる。上総五郎兵衛も首は朝長に極まったと納得。首実検が必要なら墓を掘りかえすまでのことと六波羅に告げる、と越中前司盛俊とともに手ぶらで帰る。

他方、姉玉衣は、波多次郎義通に着替えの葛籠を負わせて追放される。と、葛籠の中味は朝長。波多次郎が説明するに、師仲の策として、玉衣に言いかけてきた花垣主水をわざとけしかけ罪に落として朝長に似たるを幸いに、代わりに首を差し出したとの由。玉衣一行は、青墓の大炊の長者のところをめざす。関ヶ原を過ぎ人目もまばらと見て、朝長を葛籠より出し歩かせるが、まだ足が痛む。薬看板のある家を見付けた波多次郎、そこの女房に切り傷か打ち傷かで薬が違うと言われ、切り傷と答える。勧められるままに朝長・玉衣を連れ来る。女房は朝長の傷を見て、これは矢傷であり、しかも昨日今日のものではない。ただし、夫が帰ってきたら療治し、明日には歩けるようにすると言う。夫は浪人で、渡世のため今は外科医をしているが、追っ付け帰って来るはずと言う。

（巻二の三）浪人医者関ヶ原の武休が帰って来て治療。夜になって三人は奥に通されるが、用心深い波多は寝ないでいる。外から武士らが治療に訪れるがこれらは夜盗たち。その後、山岡太郎と名乗るさらった娘を連れて来、売り飛ばす相談をしている。娘の所持品を改めると起請文で、知盛から玉琴へのもの。奥で聞く玉衣は、妹かと驚く。ふところに金も無く、あてがはずれた山岡は小袖をはいで酒屋へ走る。残ったはけが人ばかり。波多次郎が出ていき、これは都方の公家の姫君、届け出たほうが良いと勧め、武休も言い添え、夜盗らも納得する。

（巻三の一）山岡は酒と蛸を下げて帰ってくる。五人の夜盗等は山岡に礼はするから女を渡してくれと頼むが、山岡は納得しない。武休は、奥に寝ている人の言うには、公家の姫ゆえと訳を話すが、山岡は盗んだものを返す盗賊は居ない、何より今夜は金が要る、と言う。たまりかね波多次郎が飛び出すが、武休がこれをおさえ、今でこそ盗賊相手の療治をしているが元は都方の公家の家老まで勤めた身、と気色ばむ。山岡は、それならおれも殺生好きが昂じて人まで害した故に勘当こそ受けたが、東国に生まれた武士の子とにらみ返す。五人の夜盗はやめよと声を掛け、波多次郎は刃を抜き山岡と切

り結ぶ。見かねて朝長も間に割って入る。それを見た玉衣も入り、斬り合いとはややこしい、話をつけてくれと武休に頼む。玉琴は姉と朝長を見て再会を驚く。山岡は朝長の名を聞き、畳に頭を付けて、源家譜代の上総介八郎弘常の倅助九郎通常と名乗る。お金も大炊の長者の舎弟鷲栖の玄光法師が義朝の軍資金としてのもの。これを以て、親の勘当を解かれんがため、今すぐ大炊の長のところへ、と言う。武休は師仲家の元家老桜木伊織。相役花形宮内と口論、越度により浪人の身、と言う。五人の夜盗も鷲栖玄光の手下ゆえ、みな同道していく。

［＊ポイント］梗概だけ見ると、ご都合主義でくだらないが、詳細は実に手が込んでいる。ともかく「理」が尽され、「理を責める」登場人物たち。この理が義を語り、忠を形成する。

（巻三の二）野間の内海。左馬頭義朝は実は胸に矢を受けており、命も長くないことを悟っている。ひそかに長田の庄司を呼び、息子ら（義平、朝長、頼朝）のゆくえの知れぬことを語り、源氏再興のため悪人になってくれと頼む。承知する長田に語る計略は、我が首を取り清盛に差し出し、常盤腹の三人の子を助けるよう取り入ってくれ、とのもの。長田庄司、盗賊や逃亡ならまだしも主君を討っての回忠などできないと仰天する。が、義朝の胸の傷を見て納得する。義朝続けて語るに、常盤御前はもと親宇多左右衛門尉のもとにいた頃、清盛は艶書を遣わしたが、伊通の大臣が千人の官女を集めそれに加わるをもってあきらめていた。常盤をもって清盛に取り入れ、と言う。三日後に風呂で身を清め切腹することにする。長田の求めによって、右の趣の一書をしたためてもらう。

［＊ポイント］一般には落ち目の義朝を風呂場で殺した長田庄司は悪役であるが、本話はそこに道理があったことを描きストーリーを面白くしている。清盛に従う常盤御前も同様である。

（巻三の三）長田庄司の家来友柳新吾早成は、既に鎌田兵衛政清と婚約している主人の娘・宿木（やどりぎ）に恋慕していたが、靡かぬゆえあきらめていた。しかし、平治の乱が起こり、またも艶書を送るようになっていた。なおも承引しない宿木に、心中をと無分別を言いかけ寝所に忍び入る。驚く宿木は心を静めて、わらわが夫と定めた鎌田はそなたにとっても主筋、その生死が知れがたき今、都へ上って確かめてくるのが家臣たる役目、とたしなめる。猶もしつこく酔ったように言いかけてくる友柳に宿木は、これ以上すげなく扱ってはどんな無分別を起こすやも知れずと用心し、ここは騙しすかすしかないと思い、年が明けたらそなたの心のままになると言い、その夜はいったん帰らせる。その翌日、義朝ともに鎌田兵衛が来て、喜びの中での新枕。あてがはずれた友柳は、鎌田を討てば宿木は後家となり、年明けての約束も成就されようと思うことこそ不敵である。ただし、鎌田は強力の勇者である。一度都に上がった際に、義朝の家屋敷を見て羨ましがっていた長田家嫡子先生景宗に逆心を勧める。景宗はもとより非義非道の者。義朝の領地をそっくり襲うつもりになって嬉しがっている。まず祝言にことよせ、鎌田を討つことにする。家来の弥七兵衛、浜田三郎、橘七五郎らを使って酒を飲ませた上での謀殺の計略。また、後家となった宿木をもらう約束もとりつける。

（巻四の一）長田先生景宗の企みがあるとも知らず、鎌田兵衛政清は、内祝言として衣の浦の下屋敷にいく。宿木は大酒をせぬようにと言い、自分も後から参加することに、景宗もしぶしぶ承知。そこへ渋谷金王丸が、鎌田と長田に会いたいと言って急い込んで来。宿木は、父忠宗は義朝公を浜の風呂屋へ連れる準備に朝から出ている

が、どうかしたか、と問う。義朝の代参で熱田に参ってきたが、家臣友柳が近在の力持ちを集めている。様子を探らんと、我も力のあるところを見せれば、小判二両で今晩衣の浦の下屋敷に来いとのこと。今夜下屋敷へは誰か呼ばれているのか長田庄司に確かめるべく急いで帰ってきた、との由。宿木も不審には思ったが、このまま金王丸が下屋敷へ乗り込みでもしたら困ると思い、庭の石の整理のためであろうと答える。

さて、下屋敷では宴会が始まる。そこへ宿木も来て、くだんの事を尋ねる。友柳は頓智を出し、百姓による水あびせのためだと答える。

（巻四の二）酔いもまわり、若水あびせの百姓らが入ってくる。夫婦にひしゃくで水をあびせつつ、鎌田兵衛へ突然切りつけてくる。浜田三郎、弥七郎は返り討ち。が、橘七五郎に背中から差し通される。そこへ渋谷金王丸。おそれて景宗・友柳は逃げる。金王丸は宿木の自害を押しとどめる。鎌田は大酒を反省しつつ、女房として一人なりとも仇を討てと遺言して死んでいく。金王丸は義朝が気がかりで、そちらへ向かおうとする時、童の竹若が走り寄って来て、大殿が長田庄司に討たれたと告げる。肩を落とす金王丸。

景宗と友柳は下屋敷内に潜んでいて、金王丸が居なくなったを見計らって鎌田の首を取る。上屋敷へ向かおうとするに、家の子八郎太郎が来て、庄司忠宗が浜の風呂屋で義朝を討った事を告げ、金王丸が上屋敷の門外で暴れているので来ること無用と言う。景宗・友柳は鎌田の首を見せ、義朝に詰め腹を切らせようと考えていたが、親子揃っての首尾に喜び、金王丸も討つべしと上屋敷に向かう。

金王丸は、今は常盤御前にこの事態を告げようと都をさして行く。長田庄司は義朝の遺言を鎌田兵衛に告げに行こうと思っていた矢先、宿木より事態を聞かされ、続けて帰った景宗にも得意気に言われ、真実を語ることもならず途方にくれる。宿木は泣き、父の不忠をなじる。

［＊ポイント］息子先生景宗の単純な悪逆、娘宿木の貞冽な真心との間にあって、父長田庄司は予想外の展開に言葉を失い途方に暮れる。《理を責める》論理とそれに付随する感情、後続する行動という段階ではもはやないものがここにある。論理を超えて感情や行動は暴発しているのだ。

（巻四の三）長田庄司はしばらく黙っていたが、娘の宿木にはこの不忠を真似てはならぬと言い、せめてのことに夫の仇として友柳を討てと言う。友柳は驚き、景宗も反論する。宿木が友柳に斬りかかり、庄司が助太刀する。宿木は友柳を討ち、庄司は止めに入った景宗を大袈裟に切り放つ。

［＊ポイント］途方にくれていた長田は、再び秩序と主体性を回復し行動を起こす。ただし、この場面は壮絶であり、それぞれにセリフもあり哀しい。ここでの人びとは《理を尽す機械》を超えている。

長田は宿木に夫の敵の首を取れという。宿木は改めて父に問いかける。ここまで善と悪とを分別しきる父上が、なぜに主を討ったのか、と。

［＊ポイント］忠義に対する問い。近世において問われることのなかった根源的な問い。作品タイトルの起源。

長田は答える。武士が戦場で命を掛けるのは、子孫の繁栄を信じるからだ。我も今、主を討つ不義が子孫のためだと考えたからだ、と。ただ、今は詳しくは言えぬが、これは方便の悪。そなたは尼となり、夫と、そしてその後の我の菩提を弔ってくれと、互いに泣く。宿木は、兄景宗と友柳の首を持って都にのぼる。

［＊ポイント］本話の典拠論的な調査はまだできていない。同じような筋を持つ先行作品は、近松あたりにはあるかもしれない。作者が本作に関してどこまで「意識」的なのかは分からない。作者の深化があるやもしれないし、あるいはまぐれでしかないかもしれない。巻五以下の梗概を記して、本稿をいったん閉じる。

（巻五の一）おごりを極める清盛。義朝、鎌田の首をさし出しへつらう長田庄司は、野間のおやじと呼ばれて気に入られている。

常盤御前は、母の関屋助命のため、三人の子を具して六波羅に出頭する。館次郎兵衛定国のもとへ留め置かれている。清盛は何度も常盤へ艶書を出すが、承引なし。外聞が悪いと重盛は常盤への使者を禁止する。清盛は困って長田へ相談。長田はここが肝心の所と思い、恋というものは情をかけるのが一番。重盛がなんと言うと三人の子供の命を助ける事だ、と言う。清盛は、せっかく弥兵衛が捕らえた頼朝を池の禅尼の勧めで伊豆に流すにとどめたくらいであるから、それは易い事と誓文を書く

誓文を持って長田は常盤に会いにいく。挨拶をして越王勾践の故事など語る長田に、常盤は近寄らせて懐剣で長田の胸を一突き、今若乙若牛若の三子にもこれを叩かせる。苦しい息の下で長田は首に掛けた守り袋に義朝自筆の一通、懐には清盛の赦免の一通があると告げ死ぬ。

（巻五の二）常盤は義朝の遺言状を読み、自らの先智恵を悔やむ（義朝書状は簡にして要を得たもの）。貞女の道を破ることこそ真の志と知る。館次郎定国には、夫の仇を討った今、身はさっぱりとし、今後は清盛に身を任すと語る。早速その夜から清盛が通ってくる。時は覚悟を決めて仮粧をする。渋谷金王丸は伏見に常盤を訪ねるが、清盛の妾になったと聞きあきれはてる。

清盛が祇王祇女万寿亀鶴などの白拍子を呼び、常盤に見せると聞き、義平が存命中に寵愛した亀鶴の回し男に変装する金王丸。清盛の前で、日傘に仕込んだ鑓で打ち掛かるも万寿の回し男、実は悪七兵衛景清に阻まれる。金王丸は常盤に捨て台詞を吐いてその場を逃れる。

（巻五の三）今若は全成、乙若は義円として出家。牛若は鞍馬山に預けられるが大天狗より剣術の稽古。藤原秀衡を頼み、金売吉次に随行して奥州へ。吉次に遅れて一人で樽井を過ぎ赤坂の辺で、旅宿もない所、弓矢を携えた猟師にこの先に庵がある、これを見せて庵主に止めてもらえ、と弓矢を渡される。行けば三十路の尼僧二人。これは朝長様の弓矢と見て驚き、夫が亡霊となって旅人を助けたかと言う。牛若は、朝長とは中宮大夫進朝長かと問う。尼は朝長の夫玉衣と名乗り、牛若も名乗る（玉琴は既に死んでいる由）。もう一人の尼は、長田庄司の娘宿木と名乗れば、牛若は、長田庄司忠宗の忠心は母常盤より聞いて知っていると語る。宿木は感涙。また、朝長のことを尋ねると、青墓の長大炊の弟鷲栖の玄光法師という海道一の強盗のもとに波多次郎とともに身を寄せていたが、玄光が強盗に出た隙を狙って関ヶ原の与市という郷侍が所の悪党をかたらい急襲。これに討たれてしまった由。平家に献じ、与市は今ここの領主とも。玄光法師はこれを無念に思っているが、真の武士ではないために、強盗の催促に従う者なく、今に日を過ごしていると。牛若は明晩これを討つと決め、玄光法師に知らせれば、折しも渋谷金王丸が頼朝に謀叛を勧めんため伊豆へ下る途中で、玄光の軍に出会い、牛若とも対面がなる。玄光・金王丸ともに牛若が与市を討って門出とし、奥州へ下る。（終わり）

（たかはし・あきひこ　一般教育等／日本文学）

（二〇一五年一〇月三〇日受理）